

1. 職名・氏名 准教授・森英樹

2. 学位 学位 博士（文学）、専門分野 英語学、授与機関 大阪大学、授与年月 2008年3月

## 3. 教育活動

(1)講義・演習・実験・実習	
<b>【2017年度】</b>	
① 担当科目名（単位数） 主たる配当年次等	英語 I（1 単位、毎学期開講）1 年生、2017 年度（前期 2 コマ／後期 2 コマ）
② 内容・ねらい	英語 I のねらいは、身近なトピックの英文を使って包括的な英語の知識の確認と定着を図るとともに、基本的な単語の習得と英文読解を通して視野を広げることである。
③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫	ペアワーク、グループワークも取り入れながら協同学習を促す工夫をするとともに、受講生の習熟度に応じて課題内容を変えた。授業で扱った英文の単語テストと関連テーマでの自由英作文を定期的に行い、主体的な学習の機会を与えた。
① 担当科目名（単位数） 主たる配当年次等	英語 II（1 単位、毎学期開講）1・2 年生、2017 年度（前期 2 コマ／後期（小浜）1 コマ）
② 内容・ねらい	英語 II のねらいは、読解、聴解、英作文、文法、語彙など英語運用能力のうちどれか一つに焦点をあてた演習を行い、各自が苦手とする領域を克服することである。
③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫	語彙学習では、英文読解の演習と組み合わせて定着を図るとともに、隔週で新出語彙の確認テストを行った。読解の授業では、テキストを定めて、予習を前提とした授業とすることで、教室外での学習時間の増やすことを目指した。また、小浜の授業では、自然科学の英文を毎回選定し、専門分野ともかかわりの深い英文の読解と語彙習得を促した。
① 担当科目名（単位数） 主たる配当年次等	英語特論 VB（2 単位、不定期開講）（小浜）2 年生以上、2017 年度（後期 1 コマ）
② 内容・ねらい	本授業では英文法の言語学的な理解を深めることをねらいとした。既習の文法・語法・構文について、言語学的な知識に基づく再理解を促し、
③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫	少人数であるため、毎回、発言・議論できる機会を提供して受講生の理解度を確認しながら進めた。受講生の関心やレベルに応じて、扱うトピック選定した。
<b>【2018年度】</b>	
① 担当科目名（単位数） 主たる配当年次等	英語 I（1 単位、毎学期開講）1 年生、2018 年度（前期 3 コマ／後期 3 コマ）
② 内容・ねらい	英語 I のねらいは、身近なトピックの英文を使って包括的な英語の知識の確認と定着を図るとともに、基本的な単語の習得と英文読解を通して視野を広げることである。
③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫	ペアワーク、グループワークも取り入れながら協同学習を促す工夫をするとともに、受講生

の習熟度に応じて課題内容を変えた。授業で扱った英文の単語テストと関連テーマでの自由英作文を定期的に行い、主体的な学習の機会を与えた。

① 担当科目名 (単位数) 主たる配当年次等

英語 II (1 単位、毎学期開講) 1・2 年生、2018 年度 (前期 1 コマ/後期 1 コマ)

② 内容・ねらい

英語 II のねらいは、読解、聴解、英作文、文法、語彙など英語運用能力のうちどれか一つに焦点をあてた演習を行い、各自が苦手とする領域を克服することである。

③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫

前期の読解では、英文の予習と授業中の読解演習と組み合わせることで定着を図るとともに、定期的に試験を行って緊張感を持続させた。後期の作文の授業では、基本例文について隔週で確認テストを行い基礎の定着を図った。また、中間試験の結果から受講生の理解度を把握し、それ以降の授業運営の方針を定めた。

### 【2019 年度】

① 担当科目名 (単位数) 主たる配当年次等

英語 I (1 単位、毎学期開講) 1 年生、2019 年度 (前期 3 コマ/後期 3 コマ)

② 内容・ねらい

英語 I のねらいは、身近なトピックの英文を使って包括的な英語の知識の確認と定着を図るとともに、基本的な単語の習得と英文読解を通して視野を広げることである。

③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫

ペアワークを毎回取り入れて協同学習を促しつつ、習熟度に応じて授業中の作業の内容・レベルを変えた。また 3 回ごとに、授業で取り上げた単語とポイントの復習の機会を設けるとともに、単語テストと関連テーマでの自由英作文の課題を課し、理解の定着を図った。

① 担当科目名 (単位数) 主たる配当年次等

英語 II (1 単位、毎学期開講) 1・2 年生、2019 年度 (前期 2 コマ/後期 1 コマ)

② 内容・ねらい

英語 II のねらいは、読解、聴解、英作文、文法、語彙など英語運用能力のうちどれか一つに焦点をあてた演習を行い、各自が苦手とする領域を克服することである。

③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫

補習レベル (前期) では基本事項に焦点を当て、毎回の課題と 3 週ごとの試験によって、継続的な学習を習慣づけた。上級レベル (前期) では、高校までの英文法の理解を深められるよう、英語学・言語学の知見に基づいた内容とした。中級レベル (後期) では、英文の予習を前提とした授業形態とし、毎回読解演習と組み合わせた。緊張感が継続するよう試験を 3 回に分けて実施した。

① 担当科目名 (単位数) 主たる配当年次等

言語学 (2 単位、毎年開講) 1・2・3 年生、2019 年度 (後期 1 コマ)

② 内容・ねらい

言語学のねらいは、日本語や世界諸言語のデータに触れながら、言語学の考え方や分析方法に慣れ親しみ、言語学的な観点から、母語を客観的に考察する視点を持つことである。

③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫

抽象的な内容の理解を助けるために、ハンドアウト・ワークシートを毎回準備した。各回最後には、授業内容に関連する論述形式の課題に取り組みせて理解の定着を図った。また、試験範囲が広くなりすぎないように、学期を前半と後半に分け、それぞれで試験を実施した。

(2)非常勤講師担当科目

①担当科目名 (単位数) 開講学校名

②内容・ねらい（自由記述）
③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）
④本学における業務との関連性（自由記述）
(3)その他の教育活動
内容

#### 4. 研究業績

(1)研究業績の公表
①論文 （タイトル、共著者の有無（共著の場合は主たる担当箇所について）、掲載雑誌名（号数）、掲載（受理）年月日） ・「修飾節に生じる発話の認知言語学的分析」『福井県立大学論集』Vol.50、1～14頁、2018年8月
②著書 （タイトル、共著者の有無（共著の場合は主たる担当箇所または担当ページ）、出版年、出版社名）
③学会報告等 （タイトル、報告学会（大会）名（開催年月日）、共同報告者の有無（共同報告の場合は主たる担当箇所））
④その他の公表実績 ・「英語命令文の本当の姿」『英語教育』10月号（第66巻第7号）、89～90頁、2017年（書評）
(2)学会活動等
学会でのコメンテーター、司会活動（担当報告名、担当学会（大会）名（開催年月日））
学会での役職など（学会名）
学会・分科会の開催運営（担当学会（大会）名（開催年月日）、開催場所）
(3)研究会活動等
①その他の研究活動参加（参加研究会名、調査活動名（期間））
②その活動による成果
(4)外部資金・競争的資金獲得実績
・2016年度科学研究費若手研究（B）（2015～2016年度）50万円 研究代表者 ・2018年度個人研究推進支援（ステップアップ研究支援）32万円
(5)特許出願

## 5. 地域・社会貢献

<b>(1)学外団体</b>
①国・地方公共団体等の委員会・審議会（それぞれの名称、業務内容、担当期間）
②国・地方公共団体等の調査受託等（それぞれの名称、業務内容、活動期間）
③（公益性の強い）NPO・NGO 法人への参加（それぞれの名称と活動内容、活動期間）
④（兼業規程で業務と見なされる範囲内での）企業等での活動（企業名、活動内容、活動期間）
⑤大学間あるいは大学と他の公共性の強い団体との共催事業等 （事業名称及び主催・共催者名、活動内容、活動期間）
⑥その他（名称、活動場所、活動期間）
<b>(2)大学が主体となっている地域貢献活動等</b>
①公開講座・オープンカレッジの開講（タイトル名、開催場所、開催日時） ・2019年度：ケンダイワールドツアー「オーストラリア先住民の言語と世界観」、多目的ホール、2019年6月4日
②社会人・高校生向けの講座（タイトル名、開催場所、開催日時）
③その他（名称、活動場所、活動期間）
<b>(3)その他（個人の資格で参加している社会活動等）</b>
（活動内容、主たる活動場所、活動期間）

## 6. 大学の管理・運営

<b>(1)役職（副学長、部局長、学科長）</b>
（職名、期間）
<b>(2)委員会・チーム活動</b>
（名称、期間） ・2017年度：入試本部会議、学教C 予算委員会、学教C 海外研修WG ・2018年度：入試本部会議、学教C 予算委員会、学教C 国際交流委員会 ・2019年度：入試制度検討委員会、学教C 教務・カリキュラム委員会
<b>(3)学内行事への参加</b>
（行事名、参加日時）
<b>(4)その他、自発的活動など</b>
（活動名、活動内容、活動期間）